

2009 年ロッテルダム世界柔道選手権大会報告

岡田弘隆

A report of the World Judo Championship in Rotterdam in 2009.

OKADA Hirotaka

2009 年ロッテルダム世界柔道選手権大会は、8月26日から30日までの5日間、オランダ・ロッテルダムの SPORTS PALACE AHOY において開催された。

大会には、97 の国と地域から 538 名（男子 330 名、女子 208 名）が参加した。今大会では無差別は実施されず、男女各々 7 階級、計 14 階級で世界チャンピオンを目指しての熱い戦いが繰り広げられた。

また、今大会から敗者復活戦の仕組みが変更され、ベスト 8 で敗れた者のみが敗者復活戦に回り、その勝者が準決勝の敗者と 3 位を争う方式がとられた。

今大会は、前回のリオデジャネイロ大会と比較すると、大会期間が 4 日間から 5 日間になったこと、出場国及び出場選手数の減少、無差別が実施されなかったこと、敗者復活戦の試合数の減少等が重なり、1 日のスケジュールにはかなりの余裕が感じられた。

以下に、大会第 1 日から最終日までの、各階級の結果及び日本選手の戦いについての詳細を報告する。

〈第 1 日〉

男子・60kg 級／平岡拓晃（銀メダル）

優勝 ザンタライア（ウクライナ）

2 位 平岡拓晃（日本）

3 位 ダフチャン（アルメニア）

3 位 ベルデ（イタリア）

北京五輪の金メダリスト・チュ・ミン・ホ（韓国）、銀メダリスト・ペイシャー（オーストリア）、前回の世界チャンピオン・ホークス（オランダ）等の優勝候補が、2 回戦までに相次いで敗退し、

混戦となった。

平岡は、2 回戦から登場し、ペッソア（カナダ）に背負投で「一本」勝ち、ボンボアー（ベルギー）には背負投で「技あり」を奪われたものの「合せ技」で逆転勝ち、ダフチャン（アルメニア）には「総合勝ち」で準決勝に進出。準決勝ではベルデ（イタリア）に苦戦を強いられ、ゴールデンスコアの「判定」でようやく勝って決勝に進出した。

決勝では、全て「一本」勝ちで上がってきた絶好調のザンタライアと対戦した。前後左右、スピードのある技で勝負する平岡に対し、ザンタライアは接近戦に強いタイプ。間合いが勝負のポイントとなった。離れたところから隙を見て相手の懐に飛び込みたい平岡は、左の背負投に入ろうとしたところ、ザンタライアが左で平岡の左袖を掴み、右で深く背中を掴んで引き寄せ、さらに左で平岡の右腕を差して抱きつくように小外掛を放てばこれが見事に決まり「一本」。どちらが勝つにせよ「一本」での決着の予感があったが、残念ながら、平岡はザンタライアの得意な間合いに入ってしまい、銀メダルに終わった。

男子・66kg 級／内柴正人（3 回戦敗退）

優勝 ツァガンバートル（モンゴル）

2 位 ウリアルテ（スペイン）

3 位 ウングバリ（ハンガリー）

3 位 アン・ジョン・ファン（韓国）

五輪 2 連覇中のベテラン・内柴に金メダルの期待がかかった。2 回戦、クーニャ（ブラジル）には「技あり」を先行されたものの、巴投で逆転の「一本」勝ち。3 回戦でシャリポフ（ウズ

ベキスタン)と対戦した。

しかし、この試合では内柴の良いところが全く見られず、「有効」2つを取られた後、最後は引返で「一本」負け。内柴はメダルにも届かなかった。

男子は、初日、最低でも1つは金メダルが欲しいところであったが、思惑通りにはならず、先行きに不安を抱かせるスタートとなった。

この階級は、ツァガンバートルが優勝し、北京五輪の100kg級で五輪初金メダリストを出したモンゴルから、今度は初の世界チャンピオンが誕生した。

女子・48kg級／福見友子(金メダル)

優勝 福見友子(日本)

2位 ブランコ(スペイン)

3位 ジョシネ(フランス)

3位 チョン・ジョン・ヨン(韓国)

初出場ではあるものの、優勝候補の筆頭・福見は安定した試合運びで順当に勝ち上がった。1回戦はフレイタス(ポルトガル)に背負投、2回戦はオルティス(ベネズエラ)に崩壊姿固で「一本」勝ち、3回戦はレシュチャンカ(ベラルーシ)を一方的に攻めて「反則勝ち」、準決勝では北京五輪の金メダリスト・ドミトル(ルーマニア)と対戦した。この準決勝も、ドミトルを全く問題にせず、相手に「指導」2つが与えられた後、小外掛で「一本」勝ち。決勝でブランコと対戦することとなった。

決勝は、終始、福見のペースで試合が進み、中盤、背負投で「技あり」を奪うとそのまま優勢勝ち。「一本」勝ちこそできなかったものの、落ち着いた試合運びで全く相手に付け入る隙を与えず、見事に念願の世界チャンピオンとなった。

〈第2日〉

男子・73kg級／大東正彦(1回戦敗退)

優勝 ワン・キ・チュン(韓国)

2位 キム・チョル・ス(北朝鮮)

3位 イサエフ(ロシア)

3位 バンティシェルト(ベルギー)

強豪がひしめくこの階級は、日本にとっては厳しい戦いが予想された。

初出場の大東、1回戦の相手は強豪のケフキ

シビリ(グルジア)。序盤は、大東が上手く間合いを取り、大外刈で「技あり」を奪う等、良いペースで試合を進めていた。しかし、中盤あたりから徐々に相手の圧力に下がり始め、「有効」を奪われるとさらに弱気になってきたのが見ている者にも伝わってきた。案の定、残り30秒、ケフキシビリに肩越しに帯を掴まれ豪快な釣腰で逆転の「一本」負け。最後まで攻め切る心身のスタミナが足りなかった。

結局、この階級は、優勝候補の筆頭であったワン・キ・チュンが順当に優勝し、前回のリオデジャネイロ大会に続き2連覇を達成した。

女子・52kg級／中村美里(金メダル)

優勝 中村美里(日本)

2位 ベルモイ(キューバ)

3位 カラスコサ(スペイン)

3位 タラングル(ドイツ)

世界選手権は初出場ながら、北京五輪の銅メダリスト・中村はこの階級の優勝候補筆頭。全て優勢勝ちながら順当に決勝まで勝ち上がった。

決勝の対戦相手はベルモイ。序盤はやや様子を見るような展開となり、先に「指導」を1つ与えられるが、その後攻勢に転じ、相手にも「指導」が与えられると徐々に中村のペースとなる。中盤、大外刈で「技あり」を奪うと、その後も落ち着いて相手の反撃をかわし時間となる。

中村は、大会直前に膝を負傷したらしく、本調子ではなかったものの、福見同様、非常に安定した試合運びで、派手さはないものの相手に付け入る隙を与えず、見事に初優勝を飾った。

女子・57kg級／松本薫(5位)

優勝 リバウト(フランス)

2位 モンテイロ(ポルトガル)

3位 カラカス(ハンガリー)

3位 ガシモワ(アゼルバイジャン)

このところの国際大会で安定した成績を残している松本は、初代表ながら、モンテイロ、リバウト等とともに優勝候補の1人。この日も順当に準決勝に進出した。

ところが、準決勝進出を決めた4回戦、終盤に右手を負傷するアクシデントが発生。その影響からか、準決勝では全く力を発揮できずにリ

バウトに大腰で「一本」負け。3 位決定戦でも、カラカスに掬投「一本」負けを喫し、惜しくもメダル獲得ならず。この掬投は、相手が完全にズボンを握って施しており、厳密に言えば「待て」で、相手に「指導」が与えられる場面であったように思うが、あまりにも豪快に決まったので、審判も「一本」と言わざるを得なかったのだろう。それにしても、それまでの調子は良かっただけに怪我が悔やまれる結果となった。

この階級は、松本を準決勝で下したりバウトがモンテイロを破って世界チャンピオンとなった。

〈第 3 日〉

男子・81kg 級／塘内将彦（3 回戦敗退）

優勝 ニフォントフ（ロシア）

2 位 シュンジカウ（ベラルーシ）

3 位 キム・ジェ・ブン（韓国）

3 位 ビッシュオフ（ドイツ）

2 回戦から登場した塘内は、ワンガ（アルバ）に内股「一本」で勝ち、3 回戦でケラー（スイス）と対戦した。左組みでオーソドックスな柔道をするケラーは塘内にとってはやり易い相手であると思われた。ところが、塘内が相手の引き手を嫌って下がりながら半身になって切ろうとしたところにケラーの小外刈が見事に決まり「一本」。五輪 2 大会、世界選手権 2 大会に出場しながらメダル獲得の経験がなく、今大会がラストチャンスとばかり挑んだ塘内であったが、またも世界の壁に跳ね返された。

旧ソ連勢による決勝は、ニフォントフがシュンジカウを隅返「一本」で下し、優勝。

女子・63kg 級／上野順恵（金メダル）

優勝 上野順恵（日本）

2 位 ウィルボーズ（オランダ）

3 位 マルザーン（ドイツ）

3 位 シュレシnger（イスラエル）

これまでこの階級は谷本歩実が代表に君臨していたため、初代表の上野であるが、このところの国際大会での成績は申し分なく、ダントツの優勝候補。今大会も、圧倒的な強さで決勝まで勝ち上がった。

1 回戦ではシュプリナ（ウクライナ）を崩上四方固、2 回戦ではコムロシオバ（スロバキア）

を大外刈、3 回戦でもコン・ジャ・ヨン（韓国）を大外刈、そして準決勝ではコバル（ロシア）を縦四方固で何れも「一本」勝ち。決勝で地元ウィルボーズと対戦することとなった。

地元選手の決勝進出に会場は大いに盛り上がった。しかし、そのウィルボーズに対して上野は積極果敢に攻め、1 分過ぎに大外刈で「技あり」を奪うと、そのまま袈裟固に抑え込み「技あり」合せて「一本」。完璧な内容で上野は世界チャンピオンとなった。

〈第 4 日〉

男子・90kg 級／小野卓志（3 回戦敗退）

優勝 リー・キュ・ウォン（韓国）

2 位 デニソフ（ロシア）

3 位 チョリエフ（ウズベキスタン）

3 位 メスバー（エジプト）

北京五輪後に階級を上げてから、嘉納杯優勝、グランドスラムパリ 2 位、グランドスラムモスクワ優勝と好調を維持していた小野は、混戦のこの階級において優勝候補の 1 人と目されていた。

2 回戦から登場した小野はコーエン（アメリカ）を払腰「一本」で下し、3 回戦でチョリエフと対戦した。チョリエフは組まれれば分が悪いとみて、全く組もうとせず、掛け逃げ気味の肩車等を連発。小野は十分な組み手になれず、相手の技を受け流し、「指導」を 2 つ与えられる。終盤、ワンチャンスで仕掛けた小野の内股は、僅かに「有効」に及ばず。技らしい技はその内股のみという、小野にとっては不完全燃焼な試合となった。

決勝は、リー・キュ・ウォンがデニソフを背負投「一本」で下し、韓国に今大会 2 つ目の金メダルをもたらした。

女子・70kg 級／渡邊美奈（銅メダル）

優勝 アルベアー（コロンビア）

2 位 メスザロス（ハンガリー）

3 位 ミレッド（チュニジア）

3 位 渡邊美奈（日本）

長年に渡りこの階級の代表であった上野雅恵が引退し、渡邊が初代表となった。本名視されていたデコス（フランス）が 2 回戦で敗退し混戦となる中、渡邊は 1 回戦でセル（アメリカ）

を袖釣込腰「一本」、2回戦でブワガ（コンゴ）を大外刈「技あり」、袖釣込腰「技あり」による「合せ技」、3回戦でスラカ（スロベニア）を延長戦の末、一本背負投「一本」で下し、準決勝に進出した。

準決勝の相手は、デコスを破った長身のメスザロス。これまでの対戦で分が悪い渡邊は、かなりやりづらそうであった。序盤から相手のペースで試合が進み、渡邊は「指導」を2つ与えられる。中盤、相手にも「指導」が1つ与えられ、渡邊としてはそこから更に反撃したいところであった。しかし、3分40秒過ぎ、ミスザロスが組み際に左で奥襟を取りながら右で渡邊の右脚を拘って倒し「有効」。そのまま横四方固で「一本」となり、渡邊は3位決定戦に回る。

3位決定戦でコンウェイ（イギリス）と対戦した渡邊は、いきなり肩車で「有効」を奪われ劣勢となる。中盤、袖釣込腰で「有効」を奪い返した渡邊であるが、逆転には至らず延長戦に突入。その延長の2分過ぎ、渡邊の一本背負投が見事に決まり「一本」となり、銅メダルを獲得。

決勝は、渡邊に勝ったメスザロスとアルベアーの対戦となり、アルベアーが双手刈「一本」で勝ち、コロンビアに五輪、世界選手権を通じて初の金メダリストが誕生した。

女子・78kg級／中澤さえ（1回戦敗退）
優勝 フェルケルク（オランダ）
2位 プライシェパ（ウクライナ）
3位 ウォラート（ドイツ）
3位 ソン（中国）

中澤の1回戦の相手はベテランのルブラン（フランス）。かつて、無差別で世界チャンピオンになったこともある強豪。序盤、中澤に「指導」、中盤、ルブランに「指導」が与えられるが、両者共に技によるポイントはなし。ややルブランが優勢のまま終盤を迎え、ラスト30秒を切ったあたりで中澤に痛恨の「指導」。結局、そのまま時間となり、中澤は残念ながら初戦敗退。

この階級は、地元ファンケルクが大声援に応えて優勝を飾る。

〈第5日〉

男子・100kg級／穴井隆将（銅メダル）
優勝 ラコフ（カザフスタン）

2位 グロル（オランダ）
3位 ダルウィッシュ（エジプト）
3位 穴井隆将（日本）

男子は4日目まで平岡の銀メダル1つのみで最終日を迎えた。全日本選手権の覇者穴井にとっては、プレッシャーとの戦いとなった。

初戦の相手は、リオデジャネイロの世界チャンピオン（90kg級）で、北京五輪の金メダリスト（90kg級）・ツイレキーゼ（グルジア）。穴井は落ち着いており、動きも良さそうであった。接近戦に強いツイレキーゼに対し、穴井はしっかりと間合いをとって相手の組み手にはさせない。相手の強引な攻撃を上手く捌いて、最後は上四方固で「一本」勝ち。まずは難敵を退け、3回戦でもマレ（フランス）を問題にせず、払腰で一蹴。準決勝進出をかけた4回戦でガシモフ（アゼルバイジャン）と対戦した。

この対戦の直前に棟田が敗れ、日本の男子最後の砦となった穴井、序盤から十分な組み手となり、良いペースで試合を進めていた。しかし、落とし穴が待っていた。穴井が十分な組み手から大外刈を放てば、ガシモフは巧くそれをすかして隅落に変化。穴井は完全に背中から畳に落ちて「一本」。この瞬間に、日本男子の金メダルゼロが確定した。

敗者復活戦に回った穴井は、ボロダブコ（ラトビア）に大外刈で「一本」勝ちし、3位決定戦でプロシェンコ（ウクライナ）と対戦した。この3位決定戦も穴井は自分の組み手と間合いで柔道をし、全く危なげのない展開で、最後は大外返「一本」勝ち。銅メダルを獲得した。

決勝は、地元の大歓声に後押しされて勝ち上がったグロルと、90kg級から階級を上げたばかりのラコフの対戦となり、ラコフが見事な一本背負投「一本」で勝ち、カザフスタンに五輪、世界選手権を通じて初の金メダルをもたらした。

男子・100kg超級／棟田康幸（3回戦敗退）
優勝 リネール（フランス）
2位 プライソン（キューバ）
3位 パスケビシュース（リトアニア）
3位 タングリエフ（ウズベキスタン）

2回戦から登場の棟田は、1回戦でミハイリン（ロシア）を破った地元のヴァイジスターズ（オ

ランダ)と対戦。これを難無く内股「一本」で下し、3回戦へ。

3回戦の相手はドルジバラム(モンゴル)。大きな選手であるが、これまでこれといった実績はなく、無名選手。棟田は全く問題にしないだろうと予想していた。ところが、序盤、相手の強引な技を不意に受けた棟田は肩を負傷。その後も膝あたりを痛めた様子で、全く攻撃ができなくなり、「指導」を4回受けて屈辱の「反則負け」。怪我はあったにせよ、日本代表選手として最もしてはいけない負け方であった。

この階級は、大本命のリネールがそれほど調子は良さそうではなかったものの順当勝ち。リオデジャネイロ大会に続き2連覇を達成した。

女子・78kg 超級/塚田真希(銅メダル)

優勝 トン(中国)

2位 ブライアント(イギリス)

3位 オルティス(キューバ)

3位 塚田真希(日本)

この階級は、北京五輪の金メダリスト・トンの力が突出しており、それに続くのが塚田、3番手以降は混戦といった状況である。1、2回戦を無難に勝ち上がった塚田は、3回戦でそのトンと対戦。北京五輪決勝での逆転負けの雪辱を果たしたいところであった。しかし、試合は呆気無かった。序盤、トンの背負投を堪えた塚田が背後から攻めようとしたところ、トンが塚田の腕を腋で強烈に挟み込んで一回転。後袈裟固であっさり「一本」勝ち。塚田は敗者復活戦に回り、銅メダルを目指すこととなった。

敗者復活戦では、プロコフィエワ(ウクライナ)を体落「有効」から、そのまま横四方固でがっちり抑え込んで「一本」勝ち。3位決定戦でも、コニッツ(ドイツ)を一方的に攻めて「指導」4回で「反則勝ち」。銅メダルを獲得した。

決勝は、トンが世界選手権大会では上位常連のブライアント(イギリス)を全く寄せつけず、得意の一本背負投で「一本」勝ち。世界選手権大会3連覇(無差別を合わせると4連覇)を達成した。

〈まとめ〉

北京五輪での競技内容の低下(組まない、足取り技が多い、腰を曲げた低い姿勢での組み手

争いが多い等)を受けて、五輪後に審判規定の一部改正が行われた。その主なものは、①「効果」の廃止、②ゴールデンスコアによる延長戦の時間短縮(5分から3分に)、③場内外の判断基準の変更(どちらか一方の身体の一部が場内にあれば全て場内)、④直接相手のズボンを握る行為に対し「指導」(ただし、連絡技、変化技の場合を除く)、⑤腰を曲げ頭を下げた低姿勢を取り続けること、偽装的な攻撃、組み手を嫌うことに対しより厳格に対処するというものである。これらの改正が今大会の競技内容にどのような影響を及ぼすかが注目された。

まずは、「効果」の廃止について、これは大正解であったと思う。選手は細かな失敗を恐れる必要がなくなり、思い切った攻撃ができるようになった。また、「指導」1つだけでは負けにならないということが、選手に心の余裕を与えた。審判にとっても、従来に比べ判断がし易くなったと思われる。

次に、場内外の判断基準についても、選手、審判、観客全てに対してよりクリアになった。紛らわしい場合は殆ど場内と判定されるため、選手の立場からすると、場外はないものと考えた方がよいだろう。

また、直接相手のズボンを握る行為に対し「指導」が与えられることや、防御姿勢、偽装的な攻撃等の消極的な柔道に対する罰則の強化により、随分と姿勢が起きてきて、ジャケットレスリングと揶揄された北京五輪に比べるとより柔道らしくなったような印象を受けた。ゴールデンスコアの時間短縮も何ら問題はなかった。すなわち、今回の審判規定の一部改正は、柔道の質的改善をもたらした。

さて、今大会でのメダル獲得国数は、男女合せると27カ国に及んだ。また、ウクライナ、カザフスタン、コロンビアから世界選手権、五輪を通じて初のチャンピオンが誕生した。これらのことからわかるように、世界のレベル向上は、増々加速している。

結局、日本は、金メダル3つ、銀メダル1つ、銅メダル3つを獲得し、メダル争いでは総合1位の座を死守した。しかし、これは女子の頑張りによるものであり、男子は金メダル無し、銀メダル1つ、銅メダル1つという世界選手権史上最悪の成績に終わった。結果のみならず、そ

の内容も上記の通り、7人の選手の内6人が「一本」負け（「反則負け」を含む）と完敗であった。男子は、アテネ五輪以降、カイロ世界選手権、ドーハアジア大会、リオデジャネイロ世界選手権と成績は下降線を辿っていた。北京五輪では内柴、石井が金メダルを獲得したものの、他の5階級ではメダルに届かなかった。そして今大会がこの結果であった。ただ、リオデジャネイロ大会の成績は無差別の金メダルが1つと、銅メダルが1つであったので、無差別が行われず、敗者復活戦もベスト8以上のみが進出となった今大会の結果は、僅かに上向いたと考えられなくもない。

ところで、昔は、「外国選手は3分を過ぎると必ずばてる」とよく言われたものである。しかし、今大会を見る限り、必ずしもそうは言えなくなった。逆に、日本選手が先にばてるシーンも見受けられるようになった。また、多くの外国選手には「日本選手は組んだら技が切れるから怖い」という意識があり、組ませないような戦い方が戦術として多くとられていた。とこ

ろが、最近では、特に男子においては、外国選手の方が「強引に捕まえてしまえば大丈夫」というような意識に変わったのではないかと思えるくらい、日本選手に対し怖さを感じていないような印象を受ける。むしろ、日本選手の方が、「相手の組み手、間合いになりたくない」という消極的な気持ちで試合をしているように見える。

一方、日本の女子選手は自信満々で試合をしているように写った。そのため、外国選手が怖がるのである。柔道は「心・技・体」のうち、心が最も重要である。精神的に優位な立場で戦えば結果は自ずとついてくる。充実した精神状態で戦うためには、当然、十分な準備が必要となる。十分な準備とは、しっかりと地力を身に付けた上で、その実力を十分に発揮できるような心と身体の準備を行うことである。特に、日本の男子は、そのコンディショニングの重要性をもっと重視する必要があるのではないだろうか。